

■ 保護者面談の思い出 ■

師走に入った。同時に1・2年生の2学期期末試験が始まった。寒さはまださほどではないが、北陸に冬将軍がやってくるようになると、3年生は受験へと覚悟を決める。その姿を見て3年生になった自分を思い浮かべるのだろうか、1・2年生もぐっと成長する。最近、学校は落ち着きを増したように思う。

3年の担任は今週から保護者との面談に入っている。これまでの勉強の成果がどのように表れているかを読み取り、志望に基づき模試の結果を加味しながら受験校を少しずつ絞り込んでいく。順調にきている生徒にとっても、そうでない生徒にとっても、今後の入試本番へ加速するためのエネルギーが生まれるような話し合いがなされるよう希望している。

この頃になると、決まって1人の生徒を思い出す。

18年前、私は初めての文系の担任をしていた。ちょうど保護者面談の日だった。朝のSHRを終えて教室を出ようとした時、Nさんがあっけらかんと言った。「先生！ 私のお母さん、今日の保護者面談に近所のおばちゃんを連れてくるかもしれません」。周りの生徒は呆気にとられたり、笑ったりしている。「私は別に構わないけれど…」と返したが、そんなことはないだろうと考えていた。

果たして、母親は近所のおばちゃんと一緒にやってきた。「近所の方なんですけど、面談に同席させたいのですが…」。個人情報飛び交うが、親が了承しているものを咎めることはない。「いいですよ。どうぞ」と椅子を勧めた。

聞けば、近所のおばちゃんは子どもに恵まれなかったらしい。学校の保護者面談を知らない。我が子のようにNさんの成長を気にかけてくれていた。「これが最後だから」と母親が誘ったのだという。学校での様子、成績が順調に伸びていること、現在の受験プランでいいことなどを話した。おばちゃんはニコニコして静かに聞いていた。家族だけでなく周りの大人たちがかける愛情や慈しみが子どもの人格を形成していくのだと感じた。

元気で前向きで賑やかな生徒が多いクラスだった。学級経営にいろいろな仕掛けをした。「20年後の自分への手紙」という企画をしたら、数人の保護者も手紙を書いてきてくれた。2020年の同窓会で開封することになっている。保護者も学校と一緒に楽しんでくれたことがうれしかった。

先生という仕事は、人に直接関われる仕事である。毎日試行錯誤の繰り返しでも、思いが通じていき、生徒が成長していけば本当にうれしい。そして、高校での経験が生涯に渡り、人格の礎になり、人生の糧となれば至高の喜びである。だから、教育の真の成果は10年後、20年後に表れると自分に言い聞かせていた。

約束の再会まであと2年。彼らはどんな大人になっているのだろうか。どんな人生を歩んでいるのだろうか。幸せになってくれているだろうか。